

祭り色の裼

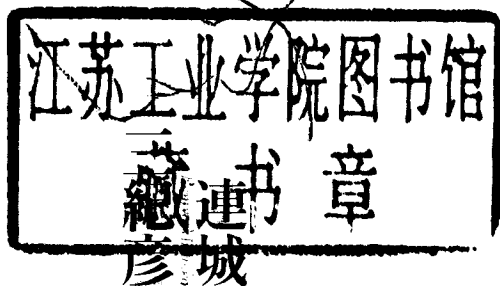


二
紀彦

Kenryo Mikihiko

連城

褐色の祭り



かつしよく まつ
褐色の祭り(下)

一九九〇年十一月二十九日 第一刷

著者 連城三紀彦 © Mikiniko Renjo, 1990

発行者 樋口剛

発行所 日本経済新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区大手町一九五

電話(〇三)二七〇・〇二五

振替 東京三・五五五

印刷 奥村印刷

製本 大口製本

ISBN4-532-09797-5

本書の無断複写複製(コピー)は特定の場合を除き、
著作者・出版社の権利侵害になります。

Printed in Japan

目次

過去しかない少年 5

無風帯 101

最後の愛 247

装帧 菊地信義
装画 荒井富美子

褐色の祭り（下）

過去しかない少年

海峡は穏やかな陽ざしを受けいれ、春の中に居心地よく眠っているように見えた。

甲板に出るとさすがに風が強いが、その風からももう冬は消えていた。波原行雄の勤める札幌市の高校では、毎年ゴールデンウィークが過ぎて間もない今ごろ、三年生のための修学旅行がある。勤め始めて七年、修学旅行の引率はこれで四度目だが、今年の海峡が一番美しく見えた。

今までで一番気持ちに余裕があるからだろう。最初は教師になって間もなくで生徒だけでなく他の引率教師にも気を遣わなければならなかったし、去年などは校内暴力を起こして問題になっていた生徒を何人も引き連れていたりした。

その点今年の生徒たちはおとなしい。既に最初の一泊を昨夜函館で済ませているが、特別気にするような問題は起こっていない。

いや、一つだけ気がかりなことが起こっている……

そのために波原は船室から甲板へと出てきたのだった。波原が担任している一人の生徒を捜すた

めだった。つい先刻ふつと氣になって船室を見まわしてみたが、その生徒の姿が見つからなかった。

甲板のあちこちに生徒たちが群がっている。大半は海を見ながら学校の中では聞けない開放的な声で喋りあっている。

「先生、一緒に写真うつそう」

女子生徒のグループに声をかけられた。年々生徒たちの言葉遣いは乱暴になってきているが、旅行に出てからのそれには日頃の乱暴さとは異質のなれなれしさが感じとれた。

この先、大学受験を目ざして大切な月日が待っている。そのためにも生徒たちとの勉強を離れた交流を図っておきたいと考えていたのだが、確かに修学旅行というのはその点では役立ちそうだった。受験の虫のようになっていいる生徒が意外に明るい顔を見せてくれたりした。

女子生徒たちの、鷗より騒がしい声に巻きこまれ仕方なく波原は皆に囲まれて被写体におさまった。

「秋場を捜してるんだ。見かけなかったか」

尋ねてみたが、「さあ」全員が首をふった。秋場の名を聞いて不意に微笑を顔から消した娘もある。少なくとも波原の目にはそう見えた。

一カ月前に新編成されたクラスだが、秋場のことはもう噂になってしまっているのかもしれない——船尾の方に進めた足を波原はすぐにとめた。

一人ぼつんと海を見ている秋場の背中を見つけた。そのひどく淋しい影をしみつかせた背中で、波原にはそれが秋場響一だとわかった。

一メートルも離れていないところで他の生徒たちが笑い興じているのだが、その笑い声から切り離され、秋場響一の背中だけがひどく遠いところに一つ外れて、あるように見える。

それは教室でも同じだった。席は教室の真ん中に近いから他の生徒に囲まれているわけだが、奇妙に片隅に座っている印象を与えてくる。

眼鏡の裏の目や瘦せた肩のあたりに、他の生徒にはない翳が感じとれた。

その翳は何が理由なのか――

波原が担任になったのは先月の新学期が始まってからだが、去年この少年が起こした事件のことは知っていた。その事件が理由なのか、それとも母子家庭だからなのか……

まだはつきりとはその生徒の何も波原はつかんでいなかった。波原自身が母子家庭に育っているから直感でわかるのだが、その翳はもっと別な理由からこの少年の体にしみついてしまったものだという気がする。教師の責任としてその理由を何とか知りたいと思っていた。

北の海峡も既に春だが、暑いというほどではない。それなのにその背中だけが、詰襟を脱ぎワイシャツになっている。

春の柔らかな光がその白い背を眩しく光らせている。その背にだけ既に夏を感じとれるのだが、それが却って十七歳の少年の体にしみついた淋しい翳を浮き彫りにしてもいた。

背中から見るといっそう瘦せて見え、その少年がもっている他の生徒とは違う何かがいっそうはつきりと見えてくる。

これから東京に向かうというのに、その少年の背だけが過去へと戻っていかうとしているかのよう既に遠ざかり水平線に消えたものを見ていた。少年？

最近の高校三年生といえども成人と変わりはないのだが、秋場響一の背中には他の生徒がまだもてずにいる不思議な大人の匂いも感じとれた。過去を見るしかなかった、明日を諦めたような三十一になる波原でさえもまだもっていない大人の匂いとその薄い肩のあたりに嗅ぎとれる……

「東京は初めてか？」

デッキを散歩していてふとその背を見つけたといった気楽な声を波原は装った。

ちらりとふり向き、すぐにその視線を海へと戻し、秋場響一は黙って肯いた。肩を並べてきた教師を別に面倒がる風でもなく、かといって興味を示すわけでもなく、その横顔はやはり一人だった。

「そうか、だったら昨日の函館のように無断外出するなよ。危ないからな」

そう言い、ごく自然に、「それで昨日の晩はどこへ行ってたんだ」と続けた。

昨夜、七時から二時間近く秋場響一は外出している。函館での夜の外出は禁止してあった。

秋場が旅館にいないのに気づいたのは九時近くになってからだった。食事が済んだ七時ごろに旅館を出ていくのを見た生徒の一人が言い、他の教師たちと相談して捜しに出ようとしたところへ、ひょっこりと戻ってきた。

「不意に散歩したくなって……」

ひと月の間に波原が見慣れた無表情で秋場響一はそう答えたが、それだけではないことはかすかに酒気を帯びた顔色で簡単にわかった。それと細い首すじから一瞬こぼれ落ちるように漂ってきた化粧品か香水の甘酸っぱい匂い……

秋場響一は灰色の皮膚をしている。

その無彩と香りの色彩との不調和な混ざり合いの中から、担任教師は淫らな連想をひき出した。この高校生は二時間の間に函館の町の夜のどこかで女を抱いてきた……

だが、昨夜は「散歩」という言葉に納得したふりをしてそれ以上は問わなかった。車中での二泊を入れて六泊七日の修学旅行はまだ始まったばかりだった。先が長いのだしと思っていたのだが、連絡船のデッキで海を眺めているうちにやはり気になってきた。

十七歳の少年が灰色の背中の中の肩のあたりににじませる不思議な大人の疲労感は、もしかしたら既に何人もの女を知っているせいかもしれない、そう感じたのだった。ワイシャツの眩しい白に包まれながら、その背中は奇妙に灰色だった。

昭和も六十年代を迎えた。最近の高校生で性交渉をもっている者は決して珍しくない。だがそれは大抵の場合若い衝動であり、若さの証拠に過ぎないのだが、秋場響一の顔や体にしみついた翳には女を知りすぎた大人の男の倦怠感さえ感じとれる気がした……

「ただの散歩というのは嘘だったんだろう」

無言の響一に、さらに波原はそう質問を重ねた。そうしてさり気ない笑顔を作り、

「先生には大体想像ができるんだがな、何をしていたか……」

と言った。

「だったらそう思ってた下さい」

唇の端をかすかにねじった皮肉な微笑で響一はそう答えた。他人を寄せつけない、自分の中に閉じこもり壁にでも向かって呟いているような声だった。

「そうはいかないよ。修学旅行中に生徒の一人が無断外出して女と寝ていたなんてことに……」

言葉の途中で波原はふと響一の胸もとに覗いた金色の光に氣を奪われた。ペンダントらしい――確かにペンダントだ――

もつとも波原が秋場響一の胸に目をとめたのはほんの一瞬だった。

「女と寝ていた――」

という教師の言葉が露骨すぎたのか、響一は反射的にふりむき、眼鏡のレンズごしに波原を見つめてきた。視線を波原の顔に釘づけにはしているが、灰色の目が何を物語っているのかはわからなかった。

「違うのか。俺にはそう思えたんだが」

波原は、故意に教師ではない口調になった。

響一は波原から顔をそむけるようにして海へと視線を戻した。それが怒ったかのように見えたので、

「間違っていたら謝るが……」

波原が言うのと、響一はかすかに首をふった。

「いや、今、ちょっと不思議な氣がしただけです」

「何が？」

「言葉にすると『女と寝ていた』っていうたったそれだけのことになるんだって……昨日の晩、俺がやったことは」

鷗が翼を大きく広げたまま、見えない糸で船につながっているように二、三メートル上方で静止している。響一が見あげると、糸が切れたように鳥は遠のき、青空へと吸いこまれていった。

何もない空を響一は、黙って見あげていた。

すぐ近くでどっと笑い声が起こった。その笑い声から、やはり響一の横顔は遠く切り離されていた。

今の言葉で響一は、昨夜函館の街に出て女と性交渉をもったことを認めたのである。すぐ近くにいた生徒のグループがよそへと移動するのを待って、

「昨日の晩、お前がしたようなことは他の生徒の多くもしたがってることだよ。だけど他の連中はみんな我慢しているし、それだけが若さの全部ではないと気づいて他のことをしようとも思っている……特に修学旅行というのは団体行動だし他人と一緒に行動するために自分を押えることを覚えるのも目的の一つだし……」

と言った。響一は案外に素直に肯いた。

波原は笑顔を作り、「ざつくばらんに訊くが……いや、教師としてじゃなく同じ男としての好奇心なんだが、何人目なんだ、もう昨日で」と尋ねてみた。

「一人目……」

呟くような小声でそう答え、「数だけならもう何人も知ってるけど、いつも一人目だっていう気がするから」風にさらわれそうなほどの薄い微笑を十七歳の少年は見せた。

却って顔の翳を濃くしただけの、淋しい笑い方だった。

「どういふことなんだ」

笑顔を消さずに波原は訊いた。

「女と寝ても体がまた汚れたという気がするだけで……体になんか残った女は全部

忘れてしまうから」

色のない、疲れたような大人びた声は「女」という言い方を少しも不自然ではなく感じさせた。

「セックスというのは別に汚れたことじゃないさ。ただ修学旅行の最中に一人だけ街へ出て女性を……という形では汚れたことになるだろうが」

波原はわざと明るい声で言い、しばらくその教師の言葉を胸の中で反芻するかに沈黙して
いた響一は、やがて、

「でも、俺わざと、汚れた女、抱いてる……」

そう呟くように言った。

「そういうのを商売にしている女性のことか」

「そういうのもあるけど、汚れてる女って俺、すぐにわかるから」

「どうして」

「何かで犯罪者は犯罪者を匂いみたいなもので嗅ぎ分けられるって読んだことある」

「……それは自分が汚れてるから他人も汚れているかどうかもあるってことか」

「もういいよ。先生心配しなくても……札幌に帰るまでもう、一人だけの別行動はとらないから」

そう言い話を打ち切りたような様子を見せたのだが、ふっと自分の手に視線を落とす、

「……俺、もともと汚れてるから……もともと汚れないと自分が自分でなくなるような怖い気がして……」

その手に語りかけるように言った。言葉とは逆に、潔癖なほど白いきれいな手をしている。細く長く伸びた指は汚れないものを掴むためにだけあるようにも見えるのだが、その手が去年の夏に

何を掴んだかを波原は、前年度の秋場響一の担任教師から聞かされて知っていた。去年、夏休みの始まる半月ほど前から秋場響一のクラスで次々に盗難事件が発生している。腕時計や財布や金目の物が盗まれ、十人以上の生徒がその被害にあった……犯人を見つけたのは担任教師だった。一学期の終業式のために生徒たちが体育館へ向かう際、最後に教室を出ようとした一人の男子生徒が、女子生徒の鞆の中に素早くその手をつっ込むのを教師は見た……その白いきれいな手が小銭入れを自分のズボンのポケットに隠したのを……

海峡を渡る風が白い影でも落としたように見えるその手が、去年そんな事件を起こしたとは波原には信じ難かった。

「いいよ、先生、心配しなくても。もう勝手な行動は慎むから」

響一にそう言われれば、教師としてそれ以上は何も言えなかった。「わかった」とだけ言い、励ますように生徒の肩を叩き、船室に戻ろうとして波原は足をとめた。

船室に通じるドア脇に女子生徒が一人立っていた。クラスの女子生徒中一番おとなしい水川圭子である。

丸みのある顔の中で、目だけが不調和に鋭く切れていてそれが利発そうな印象を与える。事実成績もよかったし、行儀もよく教師と目が合うと丁寧に頭をさげた。

ぼんやりとそこに突っ立っているだけのように見えるのだが、波原はその女子生徒がそこに立って今まで秋場響一の後ろ姿を見ていたのだと考えた。授業中に波原は教壇から何度か、水川圭子が斜め前に座っている秋場響一へと視線を投げるのを見ている。

波原は二言三言、言葉を交わしすぐに水川圭子を離れたのだが、その短い間にも圭子は二度、視

線を秋場響一の方に流した。

切り揃えた髪が風に乱れて、女子生徒の紺色の制服に包まれた肩を撫でていた。制服の硬さに無理矢理押しこめられて肩は怒っているように見えた。

その硬さを細い髪が這うように撫でながら何とか柔らかくしようとしている。教師というより一人の男としての波原の目にはそんな風に見えた。

なぜなのか、その細い髪が、今見た秋場響一の細く白い指と重なった。

青函連絡船上での言葉どおりに、その後秋場響一は一人だけ別行動をとることはなかったのだが、東京での二日目の晩である、旅館内で小さな事件が発生した。

特別な問題も起こらないまま修学旅行も終盤を迎え、一種の安堵感が教師と生徒の両方にあつた。

大広間での夕食もそれまでの夜以上の碎けた空気の中で進んだのだが、その最中に波原のもとに電話が入った。

玄関脇のフロントで電話をとると、

「秋場響一の母親でございます」

• 静かな声が波原の耳へと流れこんできた。

「あとう、何か……」

母親の丁寧な挨拶が終わったあと、波原が札幌で何か困ったことでも起こったのかと心配して尋ねると、「いいえ、大したことではないのですが、一つだけ心配なことがあります……」受話器